

[エッセイ] 私たちのドイツ体験

その他のタイトル	[Essais] Erlebnisse in Deutschland
著者	古川 英子, 吉岡 理一郎, 星野 仁美, 西野 由起江, 山川 裕美, 横山 映子, 齊藤 公輔, 福田 綾, 友部 治美
雑誌名	独逸文学
巻	48
ページ	285-307
発行年	2004-03-19
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018087

[エッセイ]

私たちのドイツ体験

1. 古川英子：ドイツ語で見る夢

かつて私にとって、これ程までに強烈に記憶に残る一年があっただろうか。初めてのドイツ、一年の滞在。ドイツで私のドイツ語が通用するのか、そこにどういった世界が繰り広げられているのか、一年耐えられるのか、そんなことは全く見当もつかなかった。だが日本でドイツ語を勉強している私は、だたひたすら日本を飛び出してドイツそのものを体験してみたかった。不安はなかった訳ではない。しかし、行ってみたい、挑戦したいという気持ちはその不安を打ち消し、私をドイツへと導いたのだ。

関西大学からの派遣留学生としてドイツの大学町ゲッティンゲンへ行った私は、そこで男女11人のルームメイトと共に寮生活を送ることとなった。大学町の寮らしく、それぞれ国籍はさまざま。半分はドイツ人で、残りの半分はロシア人、イタリア人、スペイン人、アメリカ人、スロバキア人、そして日本人の私を含めた外国人といった具合だ。各自個室が与えられ、キッチン・シャワールーム・トイレが共同となっている。この寮に入った日から私のドイツ語漬けの生活は始まった。日本にいてドイツ語を話す機会があった日は、今日はたくさんドイツ語を聞いたなとか、よく話したなと思うものだが、ドイツに来てみてそんなものは聞いた、話したというに値しないということが分かった。なぜなら、本当にドイツ語の世界の中にいると、そんなことは思いもしないからである。朝起きれば „Morgen!“ という言葉が四方八方から私に投げかけられ、一日の終わりは „Nacht!“ という言葉が私の頭の上を飛び交って幕を閉じる。ドイツ語をよく聞いたなとは一度も思わなかった。日本人が日本語を聞いて、今日は日本語をたくさん聞いたなどとは思わないのと同じである。まるでドイツ語が私にとって外国語でないかのように感じた日もあった。その一つの例として、私が一年間ドイツで夜見た夢は全てドイツ語だった。たまには母国語で夢を見たかったのだが、一度もそのよう

なことは起こらなかった。だが留学生にとって現地の言葉で夢を見るようになるというのは、この上なく嬉しいことであり、言葉が身についていると感じられる時間だ。

「ドイツ語で夢を見るようになる」というと、ただドイツに一年いればドイツ語がペラペラになると捉えられるかもしれない。このことに関しては人それぞれ異なった意見があるように思う。一年程度では、まだまだ話せるというレベルにまでは達することはないと言う人もいれば、一年もあれば日常会話程度なら出来るようになると言う人もいる。つまり、一口に一年留学といっても、その一年は留学生によっても大きく異なったものなのだ。一年で話せるようになるのかと聞かれれば私は、「一年もあればものすごく伸びるし、話せるようになる」と言いたい。というのも、私自身、周りの留学経験者達に留学前同じことを問いかけたことがある。答えは既に上述の通り、大きく分ければ二種類で、ネガティブな答えもあればポジティブなものもあった。その時はどちらが正しいのか到底分からなかったし、もし一年で外国語をマスターするのが無理ならば、一年行く意味はあるのだろうか、私が考えている程留学はいいものではないのだろうか、と色んなことが頭の中を駆け巡ったものである。しかし、こうして一年の留学を終えて今これを書いている私は、ドイツでの全ての体験を振り返り、全てに満足している。もちろん語りつくせない程苦勞することがあるかもしれない。ドイツ到着と同時にビザの申請、入寮手続き、それが終われば入学手続き、履修届け、ゼミへの参加試験、思いがけないトラブル…。もちろん全てドイツ語で行わなければならない。ここに挙げたことはほんの一部に過ぎないが、これら一連のここに挙げたことはほんの一部に過ぎない上、これら一連の作業を処理していくにあたっては、比較的高度な語学レベルが要求されるため、留学生にとっては最も骨の折れることだ。しかし、これらの山を乗り越え、ふと気づけば私にかけがえのない親友ができていた。そして、彼女たちと話すとき、私の口から自然と滑るようにドイツ語が出ていた。考え事をするときもドイツ語で考えている自分がそこにはいた。一日を終え眠りにつくと、ドイツ語の夢が私を待っていた。ドイツへ長期留学してみようという人は、なるべく留学に関して前向きな意見に耳を傾け、思い切って旅立つことをお勧めしたい。ドイツ語で夢を見たあなたはき

っと、ドイツ留学を迷っている誰かに同じことを体験してほしいと願うだろう。

(2001年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

2. 吉岡理一郎：私のドイツ

私が初めて行った外国は、ドイツのゲッティンゲンでした。名目は一ヶ月間の夏期語学講習受講を大義名分？としていましたが、当然の如くそこで覚えたことは、学習内容ではなくヨーロッパの乾燥した気候の快適な夏とビールの美味しさでした。それで夏、酒大好きで体たらくな私は、スケベ心をむき出しにあの快感をフライブルクで再体験…。ところがどっこい私の日頃の行いが祟ったのか、柳の下のドジョウは既に飛んで逃げた後で、「詐欺や〜！」と叫びたくなる様な蒸し暑さが私を待ち受けていました。清涼感をもたらす「ヴェヒレ」と呼ばれる町中の水路は、水不足で干上がって単なる何処にでもある側溝と化し、おまけにライン川を挟んだ対岸、お隣のフランスでは、過去500年の中で最も暑い夏となり、信じがたい数の人々がこの酷暑で死亡したそうです。確かに昼の1時頃、街頭のデジタル温度計が44℃を表示していた事を思うと容易に推測出来るところです。「あ〜あ、何が悲しゅうて一番高い航空機運賃の時季に、十余時間もかけて日本より暑い記録的猛暑の中に来にゃならんかったのか！とほほ！」と言いながらも毎日ビール三昧でしたが…。しかしまあ日本でも異常な冷夏が農作物に大打撃を与えましたからね。これもやはり近年の地球環境の変化に起因する異常気象なのでしょうか。異常と言えば、ちょっと奇異に思った事がありました。それは世界一自然環境保護政策に力を注いでいる事で有名なドイツ。その中でもとりわけ最先端の環境政策を誇っている都市フライブルクにも関わらず、町中にあるスーパーマーケットの野菜売場に、大量消費を文明社会と思いついでいる日本社会の如く、プラスチックの袋が無料で用意されていて、その上、食品包装用ラップフィルムも販売されていたのです。と言うのもゲッティンゲンでは探し回ってもお目にかからなかった物でしたし、それにドイツでは、袋が必要なときは迷わず紙の袋を使用して、ゴミを減らすために使い捨てをせず出来るだけリサイクル品を多用し、燃やす

と有害ガスが発生するプラスチックは使わないと、私は親しみを込めて堅く信じていたからです。また、原子力発電に取って代わる代替エネルギーの確保が十分に出来ていない時点でも早々に原発廃止を決めるなど、コストや利便性よりも目的や秩序に対して堅実かつ実直に、そして論理的に思考し行動するのがドイツ人であると私はそう理解していたからです。例えば、フライブルク郊外にあるシャウインスタントという所の山頂付近に設置された風力発電機は、自然景観にそぐわないとの民意から一度は支柱を緑色に塗装して山の木々との同化を図ろうとしたのですが、結局塗装も途中で止めて撤去することになった様です。私が見た時には発電器は外されていて緑色と灰色の斑模様の支柱だけがぼつんと立っていました。利便性や事業を優先させる日本では考えられない事ですよね。しかしまあ、いくらドイツ人と言えども「リサイクルのためのゴミの分別をする人はするが、しない人はしない」と言う話を聞いた時そんな人もいるんだと、また違った親しみを感じたりもしました。そんな親しみを感ずる事もあれば当然、不快感を感じる場合もあります。ドイツ人の「愛想悪さ」は予備知識として知ってはいたのですが、例えばフランクフルト空港の入国審査窓口で女性係官にパスポートを提示した時、その係官は一言も口を開くことなく、見るのも煩わしいかの様にわずか10秒でパスポートを投げ返してきました。勿論愛想笑いなど皆無です。また、フランクフルト空港駅で市内電車に乗る時、フランクフルト中央駅方面行きの電車が分からず、キオスクの店員に片言のドイツ語で尋ねると「Alles!」とたった一言。「ちょっと位、愛想しても罰は当たらんやろ〜!」と心で叫びながら「Danke!」と言っていた私でした。この他にもフランクフルト空港内の喫茶店での事。帰国前でお金の小銭しか無く、1・2セント硬貨などを混ぜて支払いました。するとその店員は、お金を見るなり「Was ist denn das!」と言って5セント硬貨以上のお金だけを取って、あからさまに不機嫌な顔を私に向け、一言、二言私には意味不明のことを言って立ち去りました。「小銭はお金と違うのか〜!」と私は小声でぶつぶつ言いながらフランクフルトを後にしました。寂しかったですね。しかし、親切な人にも出会いました。フランクフルト中央駅のドイツ鉄道案内所のお姉さんは、私がとんちんかんな事を言っていたにも係わらず長い間一生懸命聴いてくれて、最後には「Kein

Problem!」と笑顔で答えてくれました。また、駅の自動券売機の前で辞書を片手に立っていると小学生位の男児が走って来て「Kann ich Ihnen helfen?」と声を掛けてくれました。その向こうでその子の母親らしき人がこちらを向いて微笑んでいました。ありがとうございました。延べ60日間弱の私のドイツ体験は、異文化理解の重要性を再認識すると共に内省をより深め、お金と時間が許せばまた触れてみたい夏とビールの国、それが私のドイツです。

(2001年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

3. 星野仁美：ドイツで学生になるということ

ドイツで生活するという事は、色々な面から見て私にとっては新しいことばかりであった。そもそも日本でも1人暮らしをしたことのない私が初めて1人暮らしをするのが、ドイツである。Sommerkursと違い、1年の留学ともなればしなければならない手続きもたくさん出てくる。住居を探すこと、ビザの申請、住民登録、電話の開設、銀行口座の開設、日本で生活していたときでさえしたことがなかったことを、ドイツでドイツ語でしなければならない。他の方のドイツでの体験談を聞くと、一般的にはドイツ人は日本人ほど親切ではないという。そのような話を聞いていたため、不安感を抱きながらドイツ留学がスタートした。

実際に行動に移してみると、住居は幸いにも先輩から譲ってもらうことになり、出国間際ではあったがビザも無事に取得できた。残りの手続きはすべて、ドイツでしか出来ないことである。他の手続きも、簡単にとは言いきれないが、想像していたよりもはるかにスムーズに済ませることができた。そして、恐れていたドイツ人の対応だが、ドイツ語が不自由な私にもわかるようにやさしいドイツ語で説明してくれたり、それでもわからなければ他の手段で私がわかるまで説明してくれた。私が困っているときに、通りすがりの女性が「どうしたの?」と声をかけてくれ助けてくれることもあった。ドイツに来て1週間、大きな問題も起きずに時間は過ぎていった。実際は大きな問題が起きるのは後になってからのことだが。

私の生活しているゲッティンゲンであるが、以前にSommerkursに参

加していたということもあって、多少は土地勘もある。そしてゲッティンゲンで話されていることばは、ほぼ標準語である。話に聞くとところによるといくつか違う点があるらしいが、私にはさっぱりわからない。言語を習得するには、非常に良い環境である。

私の1年間のプランは、半年間語学学校に通い、残り半年をゲッティンゲン大学に通うというものである。ドイツの大学は半期ごとに新生の受け入れがあるのでそれも可能であり、通常授業も半年が1つの区切りである。最初に通ったのがGoethe-Institut、ドイツ語学習者にはおなじみの機関である。初日にクラス分けのためのInterviewテストが行われる。私のクラスはMittelstufe 1という中級の初めのクラス。私のほかに日本人の参加者は1人である。必然的にドイツ語でコミュニケーションを取ることが必要になってくる。ドイツ語がまだまだ不十分である私にとっては大変なクラスであった。初日から文法用語がわからなかったり、そもそも今何を話題にしているかがわからないのである。日本で習うドイツ語文法の授業は、文法用語も全て日本語である。文法の知識がわからないだけでなく、純粋に文法用語がドイツ語でわからない。そして語彙力がないばかりに、話題になっていることが部分的にしかわからないのである。2ヶ月が過ぎGoethe-Institutでのドイツ語コースが終わると、Volkshochschuleでのドイツ語コースを受講した。このクラスはドイツ語は話せるけれども、文法がわからないという外国人の参加者が多く、ここでもまた会話についていくのに必死であった。けれども、すべてドイツ語でなされる授業、わからないことばをドイツ語で理解すること、そのことに大きな意味があると思う。

語学学校に通うのと同時進行で大学の入学の準備を進める。まずは願書の提出。その後9月頃にZulassung(入学許可)をもらう、そのように私の頭の中では進んでいた。8月に参加していた大学のSommerkursで行われた大学入学に関する説明会で私が聞かされたのは、そう簡単には大学で勉強できないという内容。通常外国人学生がドイツの大学で勉強するには、授業が理解できるだけのドイツ語能力が必要になる。それを示すためのテストとしてDSHというテストが設けられている。ただし、2003年の夏学期までは、このDSHというテストを1・2ゼメスターまでの短期留学に関しては免除されていた。1ゼメスターだけ勉強した

い私はもちろん免除してもらえらるだろうと思ひ込んでいた。しかしながら2003/04年の冬学期から、短期留学の場合でもDSHの受験が必要になったとのこと。そうすると、もちろん私もこのDSHを受験しなければいけない。日常のドイツ語会話でさえたどたどしいのに、大学で授業を理解できるほどのドイツ語力があるわけがない。結局私がこのDSHのために勉強できたのは2週間ほど、こんないい加減な勉強では合格できるはずがないとわかっていたのだが、受験しなければ合格することもないと思ひ、当たって砕けろという気持ちで受験した。

結果は案の定不合格。目に見えていた結果でも、やっぱり落ち込むものだ。せめて今現在のドイツ語能力ぐらい知っておこうと思ひ、結果をもらいに行くことにした。そのことが、今大学で勉強で来ていることに大きく関係していると思ふ。結果をもらうときに担当の女性と話しているうちに、彼女は慰めてくれようと思つたのか、「次受験したらきっと合格できるわよ」と言ってくれた。次の受験となると私の帰国後で、不可能である。そのことを伝えると、「1ゼメスターならどうにかなるかもしれないから、ついてきなさい。」と、DSHを実施しているLektoratのChefのところ連れて行かれる。私は状況を把握せず、彼のところでInterviewを受けることになった。聞かれた内容は日本で勉強してきたこと、ドイツで勉強したいことである。ゲッティンゲン大学で勉強できるかもしれないというかすかな望みから、必死に私が勉強したいAnrede(人をどのようなことばで呼びかけるのか)に関する研究のことについて説明した。きっと私のドイツ語では彼が理解できるほど説明しきれいなかつたであろう。けれども彼は私の話をちゃんと聞いてくれ、最後にはある書類にゲッティンゲン大学の印を押してくれた。それはDSHのBefreiung(試験免除)であつた。DSHの受験後にBefreiungをもらう、矛盾した話であるが、ようやく私もゲッティンゲン大学の学生として勉強できることになった。

今現在はドイツ語コース、ドイツ言語学の講義・プロゼミナルをこなす毎日である。語学学校に通っていたときに比べ、はるかにドイツ語は難しいが、その反面ドイツ語でドイツ言語学を学ぶという楽しみも味わうことができる。このゲッティンゲン大学で学生として勉強できるのもあと1ヶ月であるが、帰国後にやり残したことがないよう色々なこと

を吸収していきたいと思う。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

4. 西野由起江：私の人生に入り込んだ“ドイツ”

私のドイツ生活は、自分の意思で決めたものではなく、夫の海外勤務という「仕方のない」選択によるものでした。結局、二度のドイツ滞在は7年に及ぶものになりました。1989-90年の初回の二年間、夫はドルトムント大学への派遣留学生だったため、交流のあった人たちも大学生や私の語学学校のクラスメートで、慣れないながらもとにかくドイツ語を話す機会には恵まれていました。時々、日本人の音楽家や大学研究者の家族と交流もありましたが、ドルトムントには本当に日本人が少なく、ドイツ語の勉強をゼロからスタートした私には、暫くはつらい日々でした。MetzgereiやBäckereiで何かを買わなくてはならないことさえ苦痛に感じられる日々が続きました。しかし、店の人と顔見知りになって„Frau Nishino“と呼ばれるようになってくると、買い物は苦痛ではなくなり、自分がドイツの生活者であることを実感するようになってきました。この滞在ではVolkshochschuleとInlinguaに通いながら、Zertifikatは取得したものの、いったん帰国となりました。帰国して二年後の1993年、夫がフランクフルト勤務となり、今度は10ヶ月の子供を連れての二度目の滞在がスタートしました。フランクフルトでは当時、およそ3千人の日本人が住んでおり、日本食材店、レストラン、本屋などがあり、ケーブルテレビを通してほぼ24時間日本語放送を見ることができました。ドルトムントの生活とは違い、同じアパートにも日本人家族が住んでいるし、少し車で行けば日本人が沢山住んでいる一角がありました。言葉を覚えていく子供のことを考え、私自身も子育ての悩みを母国語で話せる友人が必要と思い、日本人コミュニティーとの付き合いを大切に生活しました。しかし、一年程して子供は間違いなくフランクフルトで幼稚園児になることに気づきました。全日制日本人幼稚園が開園される予定とは聞いていましたが、そこまでして日本人社会の中で生活する必要があるのかという疑問を抱きはじめました。その上、殆どの駐在員家族は3～5年で転勤もしくは帰国となるため、親しくしていた人達

が帰ってしまうと、新しいグループを探さなければ孤立するという難しい状況に追い込まれてしまうことを知りました。そこで、この際ドイツ人ともっと親しくなろうと決意して、母子で Volkshochschule 主催の Mini-Gruppe (子育てサークル) に参加しました。週一回コーヒーとお菓子を持って集まり、歌、お遊戯、工作をしました。そこで得た情報を元に幼稚園の申し込みをし、更にその幼稚園に入る予定の人たちが作っている Mini-Gruppe に参加し、入園前から顔見知りを作ることができました。今でも幼稚園時代の友人とは親子ともども手紙やメールを交わしています。フランクフルトに滞在中は、子育てに追われてドイツ語を十分に勉強する時間がなく、単語は増えても文法力がなく、無用なコミュニケーションをとっていたにちがいません。それでも、ドイツ人の友人や幼稚園の先生たち、近隣のドイツ人が私たちを受け入れてくれたことに心から感謝しています。子供はドイツの幼稚園に2年8ヶ月通い、子供が幼稚園に行っている時間帯に、私はフランクフルト大学の学生に週一度ドイツ語の家庭教師をしてもらい、同じアパートのドイツ人の奥さんにはお茶をのみながらドイツ語で話す機会を作ってもらいました。子供が帰ってきた午後は週一回幼稚園の友達グループの親子で各家庭に順番に集まっていました。あれほどドイツ語の中にいたのに、私にはそれを自分のものにする土台がなかったことを帰国してから後悔しました。大阪に戻ってから週一回の語学学校に通っていた時、クラスメートの女性があまりにも前向きで、彼女のドイツ語学習の意欲がドイツに関する豊富な知識から生じていることに刺激を受けました。自分の意思によってドイツで7年間生活したわけではないけれど、ドイツ滞在中に自分の身に起きたあらゆることを本気で省みるために何かしなくてはと思い立って、関西大学ドイツ語ドイツ文学科の社会人編入学試験を受験しました。関西大学での二年間に、ドイツ語だけではなく、何となく知っていたドイツの行事、風習、生活習慣、言葉のニュアンスやメッセージの伝え方などありとあらゆる点で、明確にファイリングするための機能を習得したように思います。もちろん、学んだ事柄すべてを理解できて、頭の中に残っているわけではありませんが、私はドイツ生活の中で経験し、考えたことを大学での勉強という高度な専門課程でもう一度整理しなおすことができ、幸せでした。何よりも、発表形式の授業では、多くの若

い人たちの意見を聞くことができ、私自身も発表することによって、人前で話すこと、自分の意見を述べることの意義を考え直しました。日本でもドイツでも、人と接して生活していく上で大切な「言葉」の魅力について学んだことを今後の生活の中で大いに役立てられれば良いと思っています。

(2002年度 本学ドイツ語ドイツ文学科3年次編入)

5. 山川裕美：留学のすゝめ

2003年の春から、私はドイツのゲッティンゲン大学で1年間の短期学生として留学している。大学では外国人学生のための語学コースと学科の授業を平行して受講している。

学科の授業、特に講義はとても難しく、大抵zum Kotzenなのだが、難しいなりに参加していると、耳がドイツ語になれてきて、所々理解できるようになる。一方、ゼミナールでの学生のディスカッションはとても活発で面白い。先日、私が受講している比較文学入門のプロゼミナールでFilmabendが行われた。アメリカで現代版に映画化されたシェークスピアのハムレットを見て、その後に討論するというものだ。主人公の服装や身の回りの小道具を現代の物と変えることで、どのような効果があるか。限られた舞台装飾とは異なり、映画では表現が豊かになるはずだが映画ならではの良さが出ているか。物語での重要なシーンは原作の良さを崩さずに再現されているか、といった論点で話し合った。30人ほどで行われたその日のディスカッションは、私が出席した授業の中で最も盛り上がったものだった。発言者を見つめ、無言で手をあげて、発言の機会を待っている学生、待ちきれずに発言中に割って入る学生もいる。強い口調なので喧嘩をしているようにも見えるが、これがドイツでの正しい討論らしい。授業を受けている彼らの顔はいつも真剣だ。

また、このゼミナールでは1ゼメスターに1度、Grundstudiumの学生とHauptstudiumの学生が情報交換をする場が設けられている。ビールを片手に和やかな雰囲気の中、Hauptstudiumの学生がどのように研究テーマを決めたか、レジユメの書き方などの情報を交換する。また、ゼミナールに関するだけでなく、Praktikumや留学に関する話題

もあった。研究室やゼミナールでStammtisch（定期的にKneipeなどで学生たちが集まり、意見交換や雑談をすること）をしているところもある。大学に入って間もないころから、上の学年の人たちから情報を得ることで、大学での勉強の進め方を具体化し、自分が所属する学部で学べる分野の可能性をより広く知り、自分の専門分野を絞るのに役立てるそうだ。

以上が大学での授業の様子である。あたかも、学部の勉強を中心に受講していたかのように書いているが、冒頭にも書いたように、語学コースも平行して受講している。しかし、今までの10ヶ月を思い返してみると、学科の授業の方がより印象的だった。私のドイツ留学のそもそもの目的が語学の上達であったにもかかわらずだ。分からないなりに苦勞をして参加していたためだろうか。いつも学生たちの勉強への姿勢に刺激され、苦勞してでも学生たちの討論を少しでも多く理解し、参加したいと思っていた。まったく理解できない時は、悔しくて落ち込むこともあるが、何ごともしてみないと始まらない。すべてを終えた後に、満足だと思えることができれば、それは自信につながるだろうし、後悔が残れば違う形で教訓になるだろう。いずれにせよ、何もしないよりはずっとよい。

ドイツで生活し、授業を受け、友人と話をしているうちに、初めはドイツ語の上達ばかりに拘っていた考えが少しずつ変わっていった。言葉はコミュニケーションをとるための道具でしかない。道具は持っているだけでは意味が無く、他の目的のための手段・方法として利用するものなのだ。そのドイツ語という道具を通して理解した友人の言葉、ここで出会った人々から学んだ考え、文化は、ドイツ語の能力向上という目的以上のものであった。結局は、そのために言葉を学ばなければならないが、それはもはや苦ではない。

1ヶ月、1年、期間は関係なく、ドイツ語圏に限らず、これから留学を考えている学生の方につたえたい。友人との出会い、日本とは異なる文化との出会いを、大いに期待して旅立って欲しい。そのすばらしさは文字ではすべてを伝えることができない。友人と語り合う時間は、授業よりもはるかに良い勉強になったと思っている。誰かと話したい、相手を理解したいと思うと、自然に勉強をする意欲も湧いてくる。学生とい

う名目で留学する以上、大学での授業をおろそかにすることはできないけれど、しっかり楽しんで、じゅうぶんに遊んでほしい。そしてより多くの人と知り合ってほしい。

日本にいても、ドイツにいても、世界のどこにいても、人は自分以外の誰かを通して何かを経験し、学んでいる。両親、兄弟、友人、先生、ひょっとすると道端で偶然出会った、1度きりの出会いから、何かを学ぶかもしれない。だからこそ、人との出会いを大切に、楽しんでもらいたい。再会を誓ったとしても、もう一生会うことができない友人もあるだろう。しかし、彼らを忘れることは決してない。彼らと過ごした時間は、忘れるにはあまりにも惜しいものだから。

私はドイツで出会った友人と、いつか再会できることを祈って、ドイツ語を勉強し続けよう。年をとってしまってから急に思い出して手紙を書くのも良いだろう。もしかすると、友達の子供や孫にもいつか会えるかもしれない。そうしたら、この1年間の話をたくさんしてあげよう。ドイツ語を巧みに操るおばあちゃんを目指そう。すでに老後の楽しみができてしまったようで、すこしおかしいけれど。でも、こうして、一生ドイツ語と付き合っていきたい。

残りのあとふた月、私の留学に評価を下すにはまだ早いかもしれない。たとえば、まだ達成していないこともたくさんある。レポートなどの勉強はもちろん、友人と一緒に見ようと約束しているビデオがまだ沢山残っているし、キッカー（居酒屋によく置いてあるサッカーゲーム）で Mitbewohnerin にまだ一度も勝っていない。まだ話したいことも沢山あるのに……。でも、もう残りわずかとなってしまったドイツでの生活。できる限りのことをしよう。

Probier mal alles, was du machen möchtest!! Scheißegal, ob du das schaffen kannst!! Sonst kannst du weder Erfolg noch Reue haben!!
と自分に言い聞かせ、今日を楽しもう。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

6. 横山映子：伯林日記

私は3年を終了した時点で大学を一年間休学して、単身ベルリンへ来

ました。昨年4月から来ているので、もう9ヶ月の滞在になります。こちらで語学学校に通い、ドイツ語を習いつつ、暇を見つけては他のヨーロッパ諸国やドイツの都市を旅しています。私は今回ここで、私自身がベルリンを拠点にして何を経験したかについてお話したいと思います。

最初の3ヶ月は語学学校の斡旋してくれたアパートで、大家である50代のドイツ人女性の下、スペインから来た同年代の女の子と一緒に住んでいました。ここの暮らしで常に思い出されたのが、浜本教授の「ドイツ文化概論」の講義で「一般的な中年のドイツ人は節約家で、口やかましいことが多く、ホームステイは難しい」と聞いたことです。本当にその通りだと実感しました。というのもここの家の大家のリタは、これを絵に描いたような人だったからです。私は彼女から、扉の開め方、トイレトペーパーの長さ、ガスの火の強さ、水の使い方など、あらゆる事柄に指導を受けました。具体的にどういうことを言われたかといいますと、例えば、私がキッチンでラーメンを作っていた時のことです。鍋の湯に乾燥麺と具を入れ、再びお湯が沸騰するのを待っていると、リタがやってきていました。「映子！エネルギーの使いすぎよ。弱火でいいのよ。それにあんまり強い火でやると野菜のビタミンが逃げるから、弱火にすべきよ！」と言いつつ、ガスの火力を超弱火にしました。具である、玉葱やら卵などが全然煮えなかったため、3分間の鉄則はどこへやら、ラーメンを作るのに10分を要し、伸び伸びになったラーメンの麺を食べる苦痛たらなかったです。

他に、食器の洗い方にもひどく驚きました。流し台にぬるま湯をためて洗剤を入れ、その中で食器を洗います。それをすすぎ洗いなどしたりしないで使いますから、食器に残った洗剤は有害ではないのかと最初の頃はかなり気になりました。

それにリタは、最低で3日に1度の頻度でしかシャワーに入りませんでした。西欧人が浴室につかる習慣がなく、もっぱらシャワーなのはよく聞く話でしたが、彼等はシャワーの頻度も少ないのだろうか疑問に思いました。知人のドイツ人にその話をすると、「中高年の人々にはそういう人たちがいるね。私たち若者は毎日シャワーを浴びるよ。だけど、浴室につかるっていうのは、水代のコストがかかるからめったにしないけどね」という返事がかえってきました。別に、在独2年になる日本人

女性にその話をしたところ、「そうだね。私の彼（ドイツ人）もシャワーをしたがらないのよ。日本だったら、湿気とかですぐ汗をかくから毎日お風呂にはいらないといけないけど、ドイツは乾燥しているからあんまり体を洗わなくても臭くならないのがあるがたいよね」と言いました。シャワーひとつとっても、文化の違いに驚かされました。

リタとの暮らしぶりには、色々な面で強烈な印象を受けました。彼女は洗濯機と冷蔵庫のほかに電化製品とよばれるものをもっていないくて、本当に質素な、まるで修道女のような生活を送っていたように思えました。彼女だけではなく一般的なドイツ人はみんな日本人よりもずっとつつましく暮らしているようです。私は日本人がいかに物にあふれた贅沢な暮らしをしているかに気付きました。日本だけにいたら決して気付かなかった重大な事柄のひとつだと思います。

なんやかんやいって、リタとは、それなりに楽しい日々を送れました。彼女とは今でも時々会っては、オペラを見に行ったり、クリスマスケーキを一緒に作ったり、良い関係を維持しています。

語学学校との契約は3ヶ月間だけだったので、その後、リタの家を出て、自分で住居を探さねばなりませんでした。早くから、住宅情報誌やインターネットを検索して、家々を見て回りました。私は外国人ですので、アパートを一人で借りるには、親のサインや銀行残高の証明書が必要など、なにかと難しいことが多かったですし、それよりもなによりもドイツの文化に直接触れて見たかったので、ドイツ人と暮らせるWG (Wohngemeinschaft = ルームシェア) を探してまわりました。

住居探しはなにかと辛いものでした。記事を見て、自分でそこへ電話をして、アポをとり、部屋を見に行きます。10件を超える物件を見た時、それでも部屋が決まらなかったのも、「もう自分から動くのは嫌だ！！こうなればむこうから来てもらおうではないか！」と雑誌に記事をのせました。“私は日本人の女の子です。水道代など全部込みで月300ユーロまでの家具つきの部屋を探しています。(出来れば中心地に近く、インターネット回線、テレビがあれば嬉しいです)”という内容の記事を載せました。この記事がきっかけで6、7人の方々から連絡をもらいました。結局この中から決めました。今度の家は、60代半ばのバーバラという女性のマンションの一室をUntermieterin (部屋を又借りする人)と

して借りることになりました。彼女は3人の娘をもっていました、みんな成人して家を出て行っている、娘さんの空き部屋を貸していただくことになったのです。家具やキッチンのもなど、全て調っているので便利ですが、あくまでこの家は大家さんのものなので、気兼ねもなにかと多いです。

バーバラは若い頃に外国へ留学したり、外国人男性と結婚したりしたせいか、先進的な考えをもっている反面、ドイツ人女性としては多少変わった点もありました。とても強い女性で、たくさんのことを私に教えてくれました。この頃は私もだいぶドイツ語に慣れてきた頃で、彼女とは多くのことについて話しました。そこで浮上した問題はドイツ語と日本語の単語を簡単に訳することは出来ないということです。例えば日本語で「友人、友」という言葉をドイツ語では「ein Freund (男友達)、eine Freundin (女友達)」と訳します。これに「私の男友達 = mein Freund」と言うと、これは俗にいう「彼氏、恋人」という意味になります。このことはベルリンに来た当初、すでに知っていたので気をつけて「私の男友達の一人 = ein Freund von mir」と言うようにしていました。しかし、ドイツ語と日本語における言葉の意味合いの差は、これだけではありませんでした。

日本では、数回しか言葉を交わしていなくても、相手の名前を知っていて、同じ集団に属していれば、軽く「友達の一人」と言えますが、ドイツ人の間、特に年配の方々の中では、「Freund/Freundin」を使う相手は、長い年月をかけての知り合いであり、相手に完全なる信頼感と責任感を持たないとならないそうです。ちょっとした知り合いには「Bekannte」という言葉を用いるべきだそうです。

バーバラは私にいつも「映子は友達が多いわね」とか「私の友人はたった二人しかいないわ」と再三言っていました。私は彼女こそ友達が少ないなと思っていましたが…。私たちは長いことこの相互の誤解に気付いておらず、それが元で仲違いをしたこともあります。

言葉の壁はなかなか厚いものです。こういうことをきっかけとして、またドイツ語がなかなか上達できない自分に自信をなくし、ドイツ語だけを勉強している自分は、何も身につけてはいないのではないのかと悩むことがありました。そういうときに家族の来訪。自分が通訳となって

ドイツを旅して、「4ヶ月の間にこれだけ話せるようになって、よくがんばったね」と言われたとき、とても嬉しかったのをよく覚えています。

その後、東ヨーロッパをベルリンの語学学校で知り合った女性と一緒に旅しました。彼女はジャーナリストで、今はハンガリーに住んでいます。スロヴァキア、スロヴェニア、ハンガリー、クロアチア、ルーマニアなどをまわりました。その旅行では国を訪問する前に、その国のおおまかな情報を勉強してから入りました。高校の歴史の時間には東ヨーロッパの国々についてまったくといって習わなかったですから、私はあまりにもその国々について知らなさすぎました。そういう面でも、この旅行で新しく得たものは多かったです。また、ハンガリー語やスロヴェニア語など、旅先の言語がまったくわからなかったですが、東ヨーロッパ圏では外国語として、英語よりもドイツ語のほうが話されており、思いもかけないドイツ語の使用に驚きました。その時に心底ドイツ語をやっていた良かったと思います。

この9ヶ月間、本当に色々な体験が出来ました。辛いこともたくさんありましたが、それ以上に、発見することや人間の優しさに触れることが多く、それが私に喜びを与えてくれました。この場を借りて、私を支えてくれたたくさんのお友達とドイツへ行くことをあたたかく見守ってくれた両親に心から感謝の気持ちを伝えたい。本当にどうもありがとうございました。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

7. 齊藤公輔：Good Bye. DDR!

留学体験と一口に言っても伝えたいことは山ほどある。韓国人学生との交流や荷物を巡っての税関での攻防、語学学校のことや世界中の学生との交流も一つの良い思い出である。また夏には自転車でライン川沿いに旅もした。フライブルクまで野宿を交えての1週間は、「これでまた一つ人間が大きくなってしまふんじゃないだろうか…」という無駄な期待をよそに、ドイツの夏の夜は寝袋で寝ても寒いといふかなり微妙なトリビアだけが生まれた。さらに音楽大好き人間である私はほぼ毎週ゲヴァントハウスに通いつめ、ベルリンではミドリメンコンも聴いてきた。ま

たJazzにはまりだしたのもドイツに行ってからのことであり、WGで一緒だったニルスとよく聴きに行ったものだ。

このように、やはりドイツに行けば日本では絶対にできないことができるのである。当然いえばそれで終わりなのだが、それでもその「当然さ」は肌で感じてはじめて分かる質のものであるように思われる。これぞ留学の醍醐味である。まさに異世界に住むのである。

ところが、私が住んだ街はドイツの中でも「異世界」であった。なるほど、そこは確かに「ドイツ」である。バッハの本拠地であったトーマス教会があり、名作ファウストに登場する地下酒場もある。こうしてみると確かにドイツなのだが、なぜかどこか微妙に違うのである。まるで、窓ガラスの向こう側の世界のような。私が住んだ街は、かつて「ドイツ民主共和国」とよばれていた地域にある、非常に美しく切ない、伝統と格式の高い街Leipzigである。そしてこれは、その地で思ったことを綴ったものである。

卒論との絡みもあり、私はよく人にこのような質問をした。「統一してよかったと思う？」子供以下のドイツ語しか喋れない日本人がよくまあ、といった感じなのだが、それでも学生からお年寄りまで丁寧に答えてくれた。その中でやはり印象的だったのが、「私たちは別に統一なんてほしくなかったのよ」という中年女性の言葉だ。彼女は語学学校の先生なのだが、私の目にはすっかり「西化」されているように見えていただけに驚きだった。「DDRには印刷機なんてなかったからプリントは全部手書きだったし、それは大変だったわ。でも、それが当時は普通だった。誰も不便を感じてはいなかった。だから、最初私たちは別に何かをほしかったわけじゃない。ただ、結局みんなお金がほしくなってしまったのね。」クラスみんなでドレスデンに行く電車の中でそう言われたとき、その言葉がにわかには信じられず、逆に「でも便利になったでしょ」と、ちょっとした反感を持った。だって資本主義のおかげでDDRは救われたんだから。

ところが訊いた人のうちほとんどが同じような答えを返してくる。当時子供であったはずの学生まで「やっぱりお金じゃないんだよ」と言っていた。その言葉を聞いたとき、中年先生がこう言っていたことを思い出した。「確かに西の人はお金を持っている。でも、人間同士の付き合い

いはどうかしら？私にはすごく表面的に見えるわ。DDRは確かに貧乏だった。でも、人間同士の絆はとても深かったわ。」

私はしみじみ「ああ…」と溜息をついた。彼らは本当にDDRが好きだったんだとはじめて実感した。旧市街地の北西にかつてのシュタージ本部がある。そこではじめて1989年秋のシュプレヒコールを知ったわけだが、それは「我々はここにとどまる」であった。彼らは本当にそう思っていたのだろう。お金はない。シュタージの影はいつもついてくる。言論の自由など全くない。でもその代わりに、いや、人権が認められていない社会だったからこそそれを求めた人々が温かい社会を築こうとしていたのだ。人権が踏みにじられるような社会だったからこそ、人間を大切にしていこうと努力していたのだ。私には、DDRという社会はそうであったと、思えてきてならなかったのだ。

いまでもLeipzigの駅では、朝からビールを飲みながら「だいたい資本主義は…」と暇そうに話している失業者に出会える。夜になればネオナチが活躍し、物好きな私はわざわざ彼らのデモを見に行ったりもした。街の中心部は大都市らしく今では綺麗ではあるが、少し裏道に入れば今にも崩れ落ちそうな建物に人が暮らしている。ドイツに来た当初、私はこれらが嫌だった。嫌悪の対象でしかなかった。しかし、それらはもう忌み嫌うものではなくなった。だってそれはDDRが残していったものだから。失業者だって、かつては職業についていただろう。ネオナチだって、もしみんなが就職できる社会だったら少なくとも放火するには至らなかったのではないだろうか。崩れそうな建物だって、住んでみればなかなか味があって良い（私のWGのことだ）。

人々だってみな優しい。アジア人差別があるかなとは思っていたが、そんな心配は無用であった。もちろん私が遭遇しなかったというだけで、他に嫌がらせを受けた人がいないとは限らない。さらに西ドイツと比べると、東ドイツ人の外国人を見る目は明らかに冷たい。しかし、それは「オッシー」の単なる不慣れなだけであるように思う。私は足を怪我してしばらく松葉杖生活を送ったのだが、トラムに乗ればぶっきらぼうな顔をして席を譲ってくれるし、にこりともせずドアを開けてくれる。外をぴよこぴよこ歩いていると、すっと車がやってきて髭面のおじさんが「どこまでいくんか？送ってやろうか？」と言ってくれるのである。そし

てこちらが笑顔で「Danke!」と言えば、満面の笑みで「Bitte!」と返してくれるのだった。

「Good Bye. Lenin!」が封切られると、赤いネッカチーフを巻いた実物大のレーニンの胸像がLeipzigの映画館前に現れた。みんな無邪気に彼と並んで写真をとっているその風景は、かつてのイデオロギーが完全に崩壊したことを思わずにはいられない。しかし、それと人々がDDRを愛しているかは別問題である。私は帰国直前にクーダムの映画館に入った。人々は映画を見て笑う。しかしその笑いのツボはおそらくはDDR市民にしかきちんと把握されないようなものなのである。そこで笑うのである。私は「やっぱりそうだよなー」と心の中で呟いた。そして深く椅子に腰掛けなおし、必死に映画を理解しようとしながら一緒に笑って時を共有したのであった。

みんなの笑い声は、故郷に帰って旧友と再会したときのような、懐かしさに満ち満ちた泣き声だった。

(1999年度 本学ドイツ語ドイツ文学科入学)

8. 福田綾：ドイツを通して成長を振り返る

今春で、私が関西大学ドイツ語ドイツ文学科を卒業して丸3年が経ちます。現在は大学で学び、研究した「ドイツ文化」とは全く異なる会社に就職しており、自発的に関心を持って周りを見ない限り「ドイツ」との接点が全く見つけられません。また、世間的に「ドイツ語」がいかにもマイナーな言語であるか、社会に入って（厳密に言うとな就職活動を行っていた頃からですが）実感しました。このような日常生活を送っていると、自分が4年間「ドイツ畑」に浸かっていたことが嘘のように感じられます。私は学生時代に4度ドイツ語圏を旅し、自発的に「ドイツ」との接点を持つことに重点を置きましたが、その中の思い出深い1つをここで挙げます。

2回生の夏、私は友人とコミュニケーションクラスのThomas Spindler先生主催のオーストリアドイツ語体験ツアーに参加しました。私はこの時まで、入学時よりドイツ語に対する嫌悪感をずっと抱いていました。それは、皆同じスタートラインから始めたドイツ語が、私はど

うしても皆のレベルに追いつけなかったからです。参加の理由は、1年前にこのドイツ語ツアーに参加した同期生を見ると、その上達振り、そして「ドイツ」に対する関心度は目を見張るものがあり、「たった17日間で何が変わるのか」、とも感じましたが、4年間ドイツ語を学んでいくためにも、私はさすがのような思いでこのツアーの参加を決めました。

実際のところ、今となっては何の抵抗も無く、楽しんで計画を立てる海外旅行も、ドイツ語には全く自身が無く、その上今回が初めての海外旅行だったため、出発日が近づくにつれ、私は大変憂鬱になりました。しかし実際飛行機に乗り、シンガポールを経由した頃から、その恐怖感には全く感じられず、まるで希望への道を飛行機が飛んでいるかと錯覚するぐらいに、私は初めて向かうオーストリアに期待を持つようになりました。

ウィーンに朝方到着し、すぐに自由行動になり、私は友人とウィーン市内を歩き回りました。中でも大変感動した場所はStephansdomです。日本の建築様式とは全く異なった重厚でゴシックの華のように美しく建つ教会は、圧巻としか言いようがありません。澄み切った空気の内부는、重々しい外観とは異なり、異教徒の私もその場に溶け込むような新鮮な気持ちになりました。初めて現地で話したドイツ語が何であったかは覚えていませんが、全く自信の無かったドイツ語が通じたことに、震えるような感動を覚えました。2日のウィーン観光が終わると、私達はウィーンからだいぶ離れたDrautalの村に移動し、そこで残りの時間を過ごしました。そこはこれまで日本人がほとんど足を踏み入れたことの無い土地で、現地の人も大変珍しそうに、また大切な客人としてもてなしてくれました。私は毎晩ペンションのバーでマスターや地元のお客さんとドイツ語で会話し、また宿泊客の子供達と遊びました。ほとんど会話の意味も分からず、私の様子をからかっているかのように感じましたが、私の下手なドイツ語を理解しようとし、ゆっくりと話す彼らに、私はこれまで感じていたドイツ語に対する嫌悪感は一切感じず、「少しでも理解したい」と思う気持ちでいっぱいでした。

この旅行で、私は人生の中で大切なことを発見しました。それは、「自信とはつくものではなく、自分が行動し、つけるものだ」ということです。これまでの私は「自信が無いからやめておこう（自信がついたらや

ろう)」と考えていましたが、これではいつまで経っても自信はつきません。17日間という限られた時間の中で、その時の自分を精一杯発揮して動いたからこそ実感できたのだと思います。何よりここで身につけた自信があるからこそ、就職活動時にも自信を持って自分をアピールし、また現在の会社での仕事ぶりにいきづいているのだと感じています。もし、この時、オーストリアに行っていなければ、この発見は無かった、あるいはずっと後の発見になったのかもしれませんが。

このツアーから戻った私は、これまでのドイツ語に、また自身にも自信が無かった私ではなく、「少しでもドイツ語圏を知りたい、ドイツとの接点が欲しい」と強く感じるようになりました。「ドイツ」に対する姿勢に誰よりも驚いたのが自分であり、「ドイツ」を知りたいという探究心から、自分を高めることができました。Thomas Spindler先生、そしてともに参加してくれた友人には大変感謝しています。

最後になりましたが、ドイツ語ドイツ文学科の学生が、探究心を持って満喫した学生時代を送る上で、「ドイツ」は大変魅力あり、研究しがいのある国だと強く感じます。特に興味がある学生はもちろん、ドイツ語に自身が無い学生こそドイツ語圏へ行ってみてはどうでしょうか。かけがえの無い新しい発見が待っているかもしれません。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科卒業)

9. 友部治美：卒業後のドイツ語と私

私は卒業後の私とドイツ語の関わり方についてお話したいと思います。大学を卒業して、半年経ったある頃、仕事にも少し慣れて来て、家と会社を往復する平凡な毎日を送る中、私は仕事以外に興味として打ち込める何かを探していました。そんな時、何気なく、大学時代にドイツに旅行した時のアルバムを手に取り、感慨にふけりました。初めて、ドイツに旅行した時、私はほとんど、ドイツ語が話せなかったにも関わらず、一生懸命、私の拙いドイツ語を聞いてくれたドイツ人の親切な笑顔と、また、それと同時に、上手く自分の思いが伝えられなかった歯がゆさも思い出しました。

私はこのまま、ドイツ語を忘れてしまいたくないという強い思いに駆

られ、あるドイツ語会話の教室に足を踏み入れました。授業はレベルごとに分けられていて、全てドイツ語で行なわれるのですが、卒業してから、ドイツ語にほとんど触れる機会もなかったのが、最初はネイティブスピーカーと話すのは緊張しましたが、私と同じように学生時代にドイツ語を勉強して、また、社会人になってもう一度始めたいと思った人がほとんどです。留学経験もなく、会話能力はゼロに等しかった私ですが、文法に関してはほとんど申し分ないと先生に誉めて頂き、大学時代に積み重ねた努力も無駄ではなかったと嬉しく思いました。多忙な毎日を送る中、週1回通うのがやっとですが、同じような思いを持っている人と一緒に学ぶのはとても、励みになりますし、仕事だけの毎日に刺激を与えてくれます。また、社会人になって、なかなか、周りにドイツのことについて、話せる人がいなく寂しい思いをしていたのですが、みんなドイツが好きな人ばかりなので、ドイツに行った時の体験をお互いに話したりして、一種の情報交換の場でもあります。また、現役の学生もいますので、私もまだまだ学生に負けないぞという意気込みでがんばっています。宿題もあつたりして、大学の授業の延長のように、楽しんでいきます。ドイツ語は仕事ばかりの辛い毎日から私を救ってくれ、新しい世界を開いてくれました。

また、今年が念願の「ドイツ語で第九を歌う」という夢を叶えることができました。今年で21回目になる「1万人の第九コンサート」というのに、参加しました。ドイツ語で歌を歌うということ自体初めてで、3ヶ月間、週1回、練習に通いました。仕事帰りに練習に通うのは体力的にも精神的にも大変でしたが、1万人で歌う第九はとても、迫力があり、特に第九の歌詞の一部である *Alle Menschen werden Brüder* という部分では、1万人の心が一つに結ばれた気がして、とても感動しました。ドイツ語と出会うことがなければ味わうことのできない貴重な体験をすることができました。

卒業後、社会人になって、多忙な毎日を送り、私のように次第にドイツ語と遠ざかっていく人がほとんどだと思います。実際に、私も社会に出てみて、会社でドイツ語を使う機会は全くないし、むしろ英語のほうをもっと勉強しなければいけないというのが現状です。しかし、せっかく、4年間打ち込んだことなのに、一生縁を切ってしまうのは寂しく思

私たちのドイツ体験

います。私の周りでも大学を卒業して何年も経ってから、またドイツ語を始めたいと思った人も多くいます。私はちょっとした小さなことでもいいので、卒業後も多くの人ドイツ語と関わっていてくれたらいいなあとと思います。例えば、ドイツ映画を見に行ったり、ドイツレストランに行ったり。

私は、今、将来、学生時代に経験できなかったドイツ留学と大学3回生の時に知り合ったペンフレンドとドイツで会うという夢に向かって毎日ががんばっています。

(2000年度 本学ドイツ語ドイツ文学科卒業)